



狐の執念におどろく

春になって、豊作じいさんは田んぼの苗代づくりをはじめたんだとお。むかしだから通し苗代で、今の短冊型とちがって幅ひろい苗代に足あとをつけて、種もみをまいたもんだ。ところが近くのほら穴に狐が子を生んだんだとお。子狐にくわせるえさに困ってたあげく、蛙を追っかけまわし、夜な夜な苗をふんごねる。怒った豊作じいさんは、親狐のいないときをねらってほら穴にはいつていつたんだとお。そして子狐をみな殺しにして藤つるでつるして狐の出入口においたとお。晩がきて豊作じいさんはふと目をさましたとお。戸口で何か音がする。とんとんと戸をたたくと、次は板戸に何かすりつける。豊作じいさんはとっさに思ったんだとお。女中のおすいが裏二階に寝ていたが、男が忍んできたのかとなあ。そこでこっそり二階の雨戸を開けてみると、おぼろ夜に戸口のおもてに何か黒いもの